

日本体育学会
体育哲学専門分科会
会報
Vol.15(1), April, 2011

記事

- ♪ 巻頭言
- ♪ 体育哲学考
- ♪ 書籍紹介
- ♪ 私の研究
- ♪ 2011 箱根合宿研究会のお知らせ
- ♪ 運営委員会からのお知らせ
- ♪ 体育哲学専門分科会のお知らせ
- ♪ 次号予告

巻頭言

大学体育が生き残るためには

服部豊示(明治薬科大学)

3月11日に発生した東日本大地震の被害に遭われ、亡くなられた方々のご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様に対しまして心よりお見舞い申し上げます。

明るい話題でなくて恐縮ですが、数年来、体育系の大学院修了者が大学の体育教員として奉職できる人数は、以前に比べて少なくなっているような気がします。団塊の世代と呼ばれている教員が定年を迎え始めている時期なのですが、定年退職後の体育教員ポストが不補充とされることがしばしばあるようです。この原因はもちろん複雑ですが、一つの原因として、大学の専門学校化があるように私は思います。就職に強い大学であることをアピールするために専門系科目の充実が図られ、その陰で教養科目が縮小化される。その流れの中で体育が必修科目から選択科目に変更されたり、単位数が減らされ、その結果、大学体育教員の必要人数が減り、「不補充」という扱いを受けることになる訳です。

景気の先行きが思わしくない昨今、しばらくは上記のような傾向が続くかも知れません。しかし、嘆いているばかりではこの流れをくい止めることはできません。この事態を好転させるためには、大学の体育にたずさわっている私たち自身が私たち自身の力で体育（大学体育に限らず幼稚園から高校までの体育も含む）の必要性や価値を広くアピールしなければならないと思います。

ちなみに、私が勤務している明治薬科大学では、薬学教育6年制がスタートした平成18年度に合わせてカリキュラムの大改革が実施されました。改革案の策定過程において、体育の廃止論もでました。その時、薬学教育の中で体育が生き残るために、私はいくつかの決断をしました。すなわち、医療人としての心構えや態度を養成するための一助として「心肺蘇生訓練」や「不自由体験（高齢者模擬体験や車椅子を使った障害者体験）」を体育授業の中に取り込むことにした結果、従来までのスポーツ活動も楽しむことができる授業科目として体育（名称は「健康運動演習」に変更した）を存続させることができました。

ところで、この春休みに「脳を鍛えるには運動しかないー最新科学でわかった脳細胞の増やし方ー」（NHK出版、2009. ¥2,100）という本を読みました。認知症の予防などに運動がどんな効果をもたらすのか、そんなようなことが書かれているだろうと思って読み始めました。そうしたところ、最も興味をひかれたのは、運動によって海馬のニューロンが分裂して増殖（すなわち、ニューロン新生）が起きたり、皮質の容積が増えるという

事実が発見されたという革新的な事実ではなく、シカゴの西にあるネーパービルにおいて体育に対する新しい取り組みが実施されていることが紹介されている部分でした。この「新しい体育」の特徴は次のようなものでした。

すなわち、「新しい体育」と呼ばれているネーパービルの体育の神髄は、スポーツではなくフィットネス（健康）について教えるところにあります。根本にある考えは、体育の授業を通して自分の健康を観察し管理する方法を教えることができれば、その知識は生涯、役立っだろうし、生徒たちをより長くより幸せな人生を送らせることができる、というものです。

この「新しい体育」のカリキュラムでは、有酸素運動に重点が置かれています。たとえば、体育の時間に長距離走が以前よりもたくさん取り入れられています。ただし、走るのが遅い生徒のやる気を失わせないように、生徒たちは空き時間に5マイル分エアロバイクをこげば評価を上げてもらえ、A 評価をとりたい生徒はだれでも、努力次第でAが取れるようになっているとのことでした。

また、生徒は体育の授業で18の種目の中から好きなものを選べるようになっています。バスケットボールをしなさいというように、選択の余地を与えず、まるで懲罰か新兵訓練のように押しつけていたのでは生徒がそれを続けるはずがない。そのような考えから、ネーパービルでは生徒に選択肢を多く与え、得意なものを選べるようにしています。また、チームスポーツもカリキュラムに含まれていますが、「少人数のチームスポーツ」と名付けられたプログラムが多く取り入れられています。たとえば、3人対3人のバスケットボールや、4人対4人のサッカーなどで、生徒がたえず動くことになるような形で行われています。正規のルールにはこだわらず、どんな運動をしたとしても、どれだけの時間、目標心拍数に達していたかによって成績が付けられるのだそうです。

さらにまた、この学区のある高校ではスクエアダンスが新生生の必修科目に加えられたのですが、その目的はダンスの習得というよりむしろ社会性を身につけさせるところにあります。すなわち、生徒たちはパートナーと踊るだけでなく、会話することも求められる。最初の数週間は、全員、台本を与えられ、それに沿ってパートナーと会話し、一曲踊り終えるたびにパートナーを替える。授業が進むにつれて生徒たちは台本なしで会話することが指示される、というものです。

以上、ネーパービルでの「新しい体育」について紹介しましたが、このような体育に対してみなさんはどんな印象を持たれるでしょうか。私は、このような体力づくりを主体とした体育はあまり好きにはなれません。しかし、体育の価値を証明するようないろいろなデータ（エビデンス）があるので、この「新しい体育」はこの地域社会にしっかりと定着し始めているそうです。

さて、巻頭言というよりも書評のようになってしまいました。私が申し上げたかったのは、体育の価値や必要性を明示し、さらにそこで掲げた目的・目標が達成されている（成果が上がっている）ことを示す努力をしていかないと、これからの体育は生き残っていけないだろう、ということです。大災害に見舞われた東日本の日も早い復興を祈念するとともに、我が国の体育も元気になっていくよう、みんなの力を合わせて一緒に努力していきたいと思います。

服部豊示 (hattori@my-pharm. ac. jp)

大津克哉（東海大学）

昨年、NHKで放送され反響を呼んだ「ハーバード白熱教室」. 登場するのは、ハーバード大学で教鞭を執るマイケル・サンデル教授である。ハーバード大学史上最多の履修者数を誇る講義（Justice）を担当し、講義をもとにした本はベストセラーにもなっている。放送を収録したDVDを見てみると興味深い講義を発見した。サンデル教授の講義は、私たちが社会で生きる上で直面する正解が無いにも関わらず決断を迫られる様々な論議を呼ぶテーマの奥に潜む、哲学・倫理の問題について共同体主義者（コミュニタリアン）の立場から吟味していく。教授は政治哲学の研究者だが、展開される論理にはスポーツにも応用できる哲学がちりばめられている。例えば、片足に障害を持つプロゴルファーのケイシー・マーティンがプロゴルフ協会（PGA）を相手に連邦最高裁判所へある裁判を起こした事例を挙げている。循環系の疾患のせいで、コースを歩くとかなりの痛みがあり、出血と骨折の危険性がきわめて高いことから、プレー中のカート使用を認めるようPGAに求めたが却下され、裁判となったのだ。「カートを使うことは公正か？、そしてスポーツ（ゴルフ）の本質的な目的とは？」と話しは進む。そこで、アリストテレスの思想を引き合いに出し、「正義と権利について」の議論と、「社会的実践のテロスや目的について」の議論をゴルフの実例によって現代社会の論争、「目的論と名誉に基づく分配の正義の関係。名誉に値するべき資質とは何か？」という議論と、「社会的実践の目的（競技の目的は何か?）」という議論に焦点を当てて明らかにしていく。

学生からのコメントでは、ゴルフというスポーツにおいて歩くことは競技の一環であり、本質的な要素であるがゆえ歩くことが困難ならばプロとして必要な条件は満たさない。歩かずにカートの使用を認めればマーティンだけが有利になって不公平だとする一方、全員にカートの使用を認めてしまえばよい、もしくは使用できるといった選択肢を持たす。そもそもゴルフの本質は、クラブを使ってティーグラウンドから球を前に進めカップに向けて少ない打数で到達することだと活動の本質を定義する意見など様々出てくる。

授業では、裁判所の判事が「ゴルフの本質的な目的を考えるのは法廷の役割ではない。ゴルフはほかの競技と同じく娯楽である」と功利主義的な考えを述べた例が紹介される。だが、教授はゴルフの目的は観客を楽しませることだけではないと、アリストテレスの考えを引き合いに出し次のように反論する。「アリストテレス的な見方では、スポーツを単なる娯楽とはとらえない。真のスポーツ、真の運動競技は正当な評価を必要とする」と主張する。そして、スポーツの本質を突いていると思えるのは、次のような言葉だ。「スポーツと見せ物の違い、それは、スポーツが卓越性や美徳を引き出し、それを称えて評価するということにある。そういったスポーツの美徳が分かる人こそ、理解のある本物のファンだ。彼らにとってのスポーツ観戦は、単なる娯楽ではない。したがって、どのような要素がスポーツにとって本質的かという問いには意味があり、あつてしかるべき議論なのだ」と目的論的な考え方は今でも重要な場合があるのだと伝えている。

スポーツは、もともと楽しみや気晴らしを目的として発祥してきた。そして、オリンピック大会に代表されるように卓越した技量に拍手が送られ、名誉が与えられるようになっていった。だが、現状はずいぶんと変化してきている。放映権の問題やそれに絡む目先の利益などを優先させた過剰な演出を行い、万人に見せるスポーツとしての娯楽化が進み、スポーツ選手が利用されていく。そのような現代のスポーツ界において、見せ物との違いを論じ、スポーツの本来価値を改めて再考することには意味があるのではなかろうか。

余談であるが、数年前からゴルフを始め学校の先生方に声をかけていただいてコースデビューもするようになった。右に左に飛ばし、カートに乗ることもなく数本のクラブを持っては縦横無尽、小走りで移動する、半ベソをかいているそんな時にふと「ゴルフの本質って一体何だろう・・・」なんて、毎度実体験の中で考察するきっかけがやってくる。そんな私のベストスコアは「58」！。そう、世界最少ストロークを更新してギネスブックに載った石川遼選手と実は同じ。えっ？もちろんハーフのスコアですが・・・。

大津克哉 (otsu@tokai-u.jp)

書籍紹介

マルコ・イアコポーニ (2009) 『ミラーニューロンの発見』 (早川書房)

石垣健二 (新潟大学)

ご存じの方も多いただろう。ミラーニューロンとは、自らが行為するときと他個体が行為するときの両方で活性化するという脳神経細胞である。つまりそれは、他人の行為を見たりすると、自分もまるでそれと同じ行為をしているかのように反応する「物まね細胞」である。ミラーニューロンは、マカク（サル）を使った実験の最中に偶然発見された。研究者のひとりが何かをつかもうとしたとき、その傍らにおとなしく座っていただけのサルの脳内で「つかむ行為」に関連するニューロンが活性化したのである。現在ミラーニューロンの研究は、サルだけでなく人間も対象にしておこなわれており、その実験が本書で多数紹介されている。自分の行為と他人の行為をむすびつける鍵、それがミラーニューロンなのである。

そうであれば、ミラーニューロン（ミラーシステム）研究は、哲学や心理学が永らく議論してきた「他我問題」や「乳幼児の模倣理論」「共感あるいは同情の理論」を、あっさりと物理現象として説明してしまうかのようにも思われる。また、体育学も無関係ではいられないだろう。というのも、そもそも身体運動の習得とは、他者がおこなう身体運動を自らが実践「できる」ようになるというのである。その過程で他者の身体運動を「わかる」こと、あるいは他者の身体運動に「共感する」ことは、ミラーニューロンの存在と直結する問題となろう。事実、著者は次のように述べている。「自分ではテニスをしなないテニスファンでも、プロ選手が腕を振りかざしてスマッシュを打つのを見れば、やはり脳内のミラーニューロンが発火するだろう。それは自分の腕を振りかざし振り下ろすという動作を、別のかたちで必ずやったことがあるはずだからである。ましてや私のように自分でもテニスをするファンのミラーニューロンなら、いっそう強く活性化されて当然である。さらに、そのとき見ている選手がロジャー・フェデラーなら、私のミラーニューロンは猛烈に発火するに違いない。私はフェデラーの大ファンだからである」。ミラーニューロンの発見と今度の研究成果は、そのようにして、「自己-他者」の問題をすべて解明してしまうのではないだろうか。またしても？実証科学に「してやられた」、そう思う人も多いのではないだろうか。

しかしながら、やはり一流の神経生理学者は、人文諸科学との関係もしっかり見据えている。まず、彼は謙虚にも次のような趣旨のことを述べている。神経科学者たちはミラーニューロンの発見をとんでもない大発見だととらえているが、俳優たちからしてみれば、そんなものがあるということはずっと前から当然のことだったはずであると。つまり、ミラーニューロン（ミラーシステム）はそれほど人間生活のなかでは当たり前前に働いている細胞であり、また社会を形成するためにあって当然のシステムなのである。それなのになぜ神経科学者-だけではなく学术界、世間-はなおもそれを大発見とみなそうとするのか。

彼は、かの有名な「我思う、ゆえに我あり」のデカルトに遡り、「我」からすべて出発しようとするその思想に原因を見いだしている。そして、彼はそのデカルト主義を克服しようとした実存主義現象学（間主観性の理論、メルロ＝ポンティあるいはヴィトゲンシュタインの思想）の立場に歩み寄り、「形而上学的な次元にあるものを・・・この世界、すなわち自分自身の経験から成り立っている世界にあるものとして受け止め」ようと、自らの立場を「実存主義神経科学」と称するのである。そのネーミングはともかく、彼は単なる神経生理学的な事実のみでなく、具体的な人間の経験という次元を重んじようとしているわけである。

その意味からいえば、ミラーニューロン（ミラーシステム）の研究は、人間の行為や経験をすべて解明するというより、むしろその神経生理学的な根拠をようやく示したに過ぎないのかもしれない。極端にいえば、たとえこれら研究によってさまざまな行為のミラーニューロンが特定されたとしても、ある人間の「他者のとらえ方（理解・共感の仕方）」それ自体が変わるわけではないのである—もちろん、特定の脳疾患患者の脳細胞を物理的に刺激して治療することはあり得るのかもしれない。ある人間の「他者のとらえ方」を変えるためには、やはりそれに見合った具体的な経験そのものが必要になってくる。逆にいうならば、そうした経験をするなかで、それに見合ったミラーニューロンが働くようになるのだろう。つまり人間は生得的にミラーニューロンをもっているに違いないが、実際にそのミラーニューロンが働くようになるためには具体的な経験が必要になるはずである。

今回の大震災に同情する人間は多いだろう。しかし、被災地の人々に対する理解・共感の仕方は人それぞれである。人間としてどんな理解・共感の仕方がのぞましいのだろうか。また他者への無関心は現代の社会問題である。子どもたちは、他者をどのようにとらえているのだろうか。他人に対して「スイッチを切っている」としか思えない学生をたまに見かけることがある。また他人の行為をロボットが動いているようにしかとらえていないだろうそんな学生も見かける。そこでは、ミラーニューロンが正常に働いていないのかもしれない。神経生理学的に言えば、そういうことになる。しかし、それらを目にするわれわれ体育学者は、あるべき「他者のとらえ方」を見据えつつ、人間にとってどのような身体教育（経験）が必要になるのかを問わなくてはならないだろう。体育学者からしてみれば、ミラーニューロンが発見されるよりずっと前に、そんなもの（身体的共感）があるということは当然のことだったのだから。神経生理学的な説明とは異なる仕方で、そうした現象を解き明かすことが重要となろう。

石垣健二 (ishigaki@ed.niigata-u.ac.jp)

私の研究

非リーグ型 PS としてのプロゴルフの研究

高岡英気（筑波大学）

私は現在、プロゴルフについての研究をおこなっています。

プロスポーツに関する学術研究は、経済学、経営学、法学、社会学といった様々な領域において数多く為されていますが、その大半は野球やサッカー、バスケットボール等の、いわゆる「リーグ型」のプロスポーツを対象としたものです。一方、世界にはリーグ型とは別の運営形態をもったプロスポーツが数多く存在します。2010年にフォーブス誌が発表した世界の高額収入アスリート上位20名の中では、半数近くのアスリートがゴルフやボクシングといった「非リーグ型」のプロスポーツに携わっています。すなわち、少なくとも経済的な成功という意味において、世界のトップ20に入るアスリートの半数近くがリーグ型以外のプロスポーツに携わっているのです。

また、その運営形態に着目した時、リーグ型のプロスポーツと非リーグ型のそれには大きな違いがあることが分かります。リーグ型はチーム競技であるのに対し、非リーグ型は個人競技が中心です。またリーグ型では、各チームがホームタウンもしくはフランチャイズと呼ばれる特定の地域において試合を開催し、観客から入場料を徴収することを事業のベースにしているのに対し、非リーグ型では、開催地を特定の地域に限定せず、全国、あるいは全世界の諸地域を転戦するというスタイルがとられています。

リーグ型プロスポーツに関しては、このような運営形態に着目し、チームやリーグ機構の組織構造、そしてそれらと競技者やファンといったステークホルダーとの関係性を明らかにしようとする試みが多くの先行研究によって為されています。一方で、それとは異なる運営形態をもった非リーグ型のプロスポーツにおいて、どのようなステークホルダーが存在し、それらがどのような相互関係をもつのか、といった疑問については、先行研究が乏しく未だ十分に明らかになっていないとは言えません。こうした中、プロスポーツについての包括的な議論を展開するためにも、非リーグ型のプロスポーツの分析は避けて通れない課題です。

こうした観点から筆者は、非リーグ型のプロスポーツの代表的な事例としてプロゴルフの分析を研究課題としました。プロゴルフは、上のランキングにおいて1億ドルという圧倒的な収入を獲得し第一位に輝いたタイガー・ウッズ (Tiger Woods) を輩出している一大産業です。2010年現在、そのウッズが主戦場としているのがPGA ツアーと呼ばれるアメリカの男子プロゴルフツアーです。研究の目的は、このPGA ツアーがどのような歴史過程を経て成立したのか、またそれが現在どのようなステークホルダー間の関係性によって成り立ち、さらにはどのようにして事業を安定的に継続させているのかを分析することで、それが成立するための総体的なメカニズムを明らかにすることです。

現在まさにこうしたテーマについての論文を執筆しているところです。

高岡英気 (lt-hideki@muc.biglobe.ne.jp)

夏期合宿研究会2011 in HAKONE

深澤浩洋(筑波大学)

本年度も下記の要領で夏期合宿研究会を開催します。今回も土日・祝日(海の日)の日程を組みました。また、特別企画につきまして、企画案を募集します。奮ってご参加下さい。

深澤浩洋(合宿研究会担当:筑波大学)

期日:2011年7月16日(土)、17日(日)、18日(月、祝日)

場所:静雲荘(住所)〒250-0408 神奈川県足柄下郡箱根町強羅1320

(電話)0460-82-3591

♪小田原駅より箱根登山鉄道にて終点・強羅下車/改札口を出て右手地下道をくぐり直進/道なりに左にカーブする坂道を約120m登った右手にあります。

☆日程表(申込みの状況によって、多少変更になることがあります)

	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20
16日(土)						受付	研究会①					夕食		
17日(日)	朝食		研究会②		昼食*		研究会③					懇親会		
18日(月)	朝食		研究会④	事務協議	解散									

(*は運営委員会)

☆特別企画：企画募集

かつて実施しましたラウンドテーブル形式でも、その他の形式でも結構です。企画に関するご提案・ご意見をお寄せください。深澤 fukasawa@taiiku.tsukuba.ac.jp までよろしくお問い合わせいたします。

☆費用：22,000 円（予定，去年と同額）

- ・研究会参加費：3,000 円
- ・宿泊費等：19,000 円（全日程参加の場合／2 泊朝夕食，懇親会費を含む）
- ・シングルでの宿泊も申し受けます（先着 3 名まで，追加料金：1 泊 2,000 円）
- ・学生，院生，研究生には若干の宿泊費の補助があります。奮ってご参加下さい。

☆6月20日（月） 必着にてお申込み下さい。

- ・Eメール：お名前，ご所属，連絡先，発表演題，宿泊のご予定（食事の有無を含む）について，深澤委員 fukasawa@taiiku.tsukuba.ac.jp までお知らせください。
- ・同封のハガキ：必要事項の記入と 50 円切手を貼付の上，送付してください。
- ・特に，部分参加の場合は，宿泊および食事の要・不要について正確にお知らせ下さい。
[16 夕食，16 宿泊，17 朝食，17 昼食，17 夕食，17 宿泊，18 朝食]
- ・参加予定に変更が生じた場合は，速やかに担当者までご連絡下さい。
- ・7月8日（金）以降のキャンセルについては不泊料金が必要となります。

☆詳しい「プログラム」は，7月1日頃にお送りする予定です。

夏期合宿研究会担当運営委員：深澤浩洋

〒305-8574 茨城県つくば市天王台 1-1-1 筑波大学体育科学系

E-mail：fukasawa@taiiku.tsukuba.ac.jp Tel&Fax：029-853-6341（研究室直通）

お問い合わせは，なるべく E-mail またはファクスをご利用下さい。

運営委員会より

新保 淳（静岡大学）

今年度の日本体育学会（於：鹿屋体大）に関する情報

- 1) 学会大会のホームページ (<http://www.jspe62.nifs-k.ac.jp/>) が立ち上げられています。そちらから大会参加等の申し込みができます。
- 2) 2011 年（平成 23 年）5 月 13 日（金）が参加・申し込みの締め切りです（延長はありません）。

分科会メーリングリストへのご登録のお願い

メーリングリストへ登録済みの方へはメーリングリストによって会報が配信されております。速報性，経済性，分科会活性化の観点から，是非ともご登録をお願い申し上げます。以下のような手順で登録できます。

- 1) グループへ参加するには，事務局：新保（ehashin@ipc.shizuoka.ac.jp）までご一報ください。事務局にて登録の手続きをさせていただきます。
- 2) 登録完了後，taiikutetsugaku@yahoogroups.jp を用いてグループメンバーにメッセージを配信することができます。

なお，異動等の関係でメールアドレスに変更があった場合は，速やかに事務局までお知らせ下さい。宜しくお問い合わせいたします。

定例研究会のお知らせ

舛本直文（首都大学東京）

平成 23 年度第 1 回定例研究会を 2011 年 5 月 14 日（土）に下記の要領で開催いたします。

なお、研究会終了後 **18 時より懇親会** を予定しております。会員の皆さま、ぜひともご参集ください。（発表内容は未定です。発表のご希望がある方は舛本 naomasumoto@tmu.ac.jp までご連絡ください。）

- ・日 時：2011 年 5 月 14 日（土） 15：00～17：30（運営委員会は 13：00 から）
- ・会 場：明治大学駿河台キャンパス リバティータワー1094 教室（9 階）
JR 中央線・総武線，東京メトロ丸ノ内線／御茶ノ水駅 下車徒歩 3 分
東京メトロ千代田線／新御茶ノ水駅 下車徒歩 5 分
都営地下鉄三田線・新宿線，東京メトロ半蔵門線／神保町駅 下車徒歩 5 分
- ・お問い合わせ：090-4207-7376（釜崎太）



次号予告！

次号は研究情報などの内容でお届けする予定です。投稿を下さいます方は釜崎太（tskonf.-19und20@tbt.t-com.ne.jp）までお問い合わせ下さい。

体育哲学専門分科会報第 15 巻第 1 号

発行者 日本体育学会体育哲学専門分科会
大橋道雄（会長）
編集者 阿部悟郎（広報委員長）
発行日 平成 23 年 4 月 14 日
連絡先 989-1693 宮城県柴田郡柴田町船岡南 2-2-18
仙台大学体育学部
0224-55-1147（直通）
アドレス：gr-abe@scn.ac.jp

【編集後記】

新たな年度の幕開けです。体育哲学専門分科会も新体制で起動。本年度も研究発表に、論文作成に、某所談義に頑張りました。さて、この数日、学生と災害ボランティアに出かけています。沿岸部の被害は特に甚大で、筆舌に尽しがたい惨状です。復興は長期戦になりそうです。われわれの作業は、津波の被害を受けた小学校や中学校の瓦礫撤去や汚泥のかき出し等が中心ですが、泥土にまみれた手製のお道具袋や絵日記、ピアノ等々、一つ一つが心に突き刺さります。救いはただの一点。あくまで私的な救いですが、それは学生達の汗まみれの頑張りでした。講義中（わたしの）には（まったく？）みられない（みせてくれない？）素晴らしい姿にただただ感銘。うちの子達もなかなかやるもんだ。歳のせいとか、いつしか教師の目ではなく、親の目になっていました。そんなわけで会報編集は K 崎先生におんぶに抱っこ。いつもごめんね。A 挿一未曾有の震災・津波被害等を悲しみ、一日も早い復興を祈念しつつー